

建築の楽しみ方

文筆家 甲斐みのり

NO.56

●まちに出てみると自分の好きなものだらけ

私の両親が俳人だったのですが、夫婦の会話を五七五でするぐらゐの特殊な家庭に生まれ育ち、私も子どもの頃から言葉のリズム感のようなものがすごく好きでした。その頃は歌番組がたくさんあったので、昭和の歌謡曲を聞きながら作詞ごっこをして遊んでいるような子どもでした。家族で遊びに行く場所もディズニーランドのようなところには連れて行ってもらえず、週末は親が俳句を読むために野山に行っていました。ゲームなども買ってもらえなかったのですが、本だけは自由を買ってもらえる環境で、それをずっと読んで育ってきたので、子どもの頃から本にまつわる仕事や文章を書く仕事に就きたいと思っていました。大阪芸術大学の文芸学科に進学し、はじめは文芸学科で勉強していたら本の仕事に就けるという思い込みがあったのですが、実際は本の仕事に就ける人なんて少ないということが分かり、その後人生に迷って自分探しを始めました。ある日、藤森照信さんや赤瀬川原平さんが路上観察学会という活動をもとに出版された『京都おもしろウォッチング』^(注1)という本を見つけました。「トマソン」と呼ばれる、階段が取り払われて高いところに残った扉のような、まちなかの不思議な風景や建築を紹介している本を読んですごく面白いなと思ったのです。そんなふうにあちを見たり路上観察をすることも人生の楽しみの一つになるということを知り、それからまちなかで見つけた面白いと思うものをカメラで撮り歩いて楽しむようになりました。また、日本のサブカルチャーの元祖と言われている植草甚一さんの『ぼくは散歩と雑学がすぎ』^(注2)や『いつも夢中になったり飽きてしまったり』^(注3)といったまち歩きの本を見つけて「こんなことで本になるんだ」という衝撃を受けたのです。仰々しくなければ本じゃないと思っていたのですが、植草さんの本は神保町のまちを歩いて古本屋を巡ってコーヒーを飲んだということを延々と書いている。でもそれが私にとってはすごく面白く感じました。藤森さんや赤瀬川さんがまちを観察して誰の目にも止まらないようなものを大の大人たちが本気で学問のように語り合っていることがすごく面白かったのです。まちに出て、まちを見渡して、まちを歩いていると、自分の好きなものだらけということに気が付き、自分もまちに出ていろいろ見つけていこうと思ったのが学生時代であり、それが今の仕事の根底にあると思っています。

●「好き」を伝えることはささやかな平和活動

私は文筆家と名乗りながら文章を書くこと自体はあまり得意ではありません。書くことは一生懸命やっていると時間がかかってしまいます。それよりも先に何かを見て「好き」という気持ちがまず湧き起こってきて「心がときめくなー」という思いを人と共有したい、伝えたいと思うのです。「好き」なことを伝え、共有することはささやかな平和活動だと思っています。「好き」を見つけた時ってすごく機嫌が良くて何かを責めるような気持ちにならないのです。自分が好きなものに満たされているとみんなも満たされるのではないかと。みんなが「好き」と思う気持ちを日々育てていくと世の中はどんどん平和になって、お互いを責め合うのではなく、お互いの好きなものを認め合って世の中が平和になると信じています。本をつくるのはその平和活動をするという意味でもあり、写真の力も借りながら不得意な文章を頑張って書いているという感じです。

建築の分野は専門的で、自分が普段やっているお菓子や手土産のジャンルとは違う特別な世界と思っているのですが、自分のように建築が好きだけ難しいことは分からない、でも「好き」という気持ちだけはあの人たちのためにちょっと通訳をするような感覚で文章を書いています。難しくとらえなくても建築は受け入れてくれるよということを伝えたい。建築の世界は学問であり数字の世界でもあり専門分野であるけれど、自分がファンだと言って関わったり飛び込んだりしてみたら、建築そのものや建築に携わる方々にもすごく温かく優しく心深く受け入れてもらえたという経験をしたので、「安心してみんなも好きって言っていいよ」ということを伝えたいと思っています。私も建築の専門用語を一目で理解できないので、難しい用語をわかりやすく書くようにしています。建築を見るときには、調べればわかる建築家の名前や建てられた年代、様式などを必死に覚えることよりも、とにかく足を運んで、愛でて、声に出して「好き」と言うことが大事です。建築をつくられている方やそこを守っている方に私たちのような「好き」と思う人がいるということ伝えることによって、さらにどんどんよい建築ができたり、守られていったりするのだと思います。声に出してファンがいますよということを伝えていくために、通おう、行こう、足を運ぼう、愛でようということ伝えていきます。

●古い建物が纏うただものではない気配

大学に入学するときに生まれ育った静岡から都会に出ることになりますが、大阪はやっぱり自分にとって本当に大都市だったので大阪の風景というのはすごく面白く刺激的でした。大学の授業で中之島図書館に行って司書の資格を取るための資料を調べてくるような課題が出たのですが、図書館に行ったら課題なんかよりも「なんだこの図書館は！」という衝撃を受けました。神殿のような建物に圧倒されてここが本当に今使われているということにすごく不思議に思いました。建築との関わりはこの中之島図書館に行ったことがすごく大きなきっかけでした。それから中之島の中央公会堂や天王寺の市立美術館に足を運んで中に入ったりしてみました。私にとって大阪時代は建築に対する興味としてはまだそこまで開花はしてなくて、誰が設計したのかなぜ建てられたかなどは知らず素敵だなという程度に思っていました。ただ、古い建築には特殊な雰囲気があり、ただものではない気配というか絶対何かがここにはあるといった感覚が先にくるのです。どう



大阪府立中之島図書館

してここにこれがずっと残っているのだらうと思い、建物の歴史などをもっと深く知りたいと思ったのですが、情報を得たいと思っても大阪にいた時は今のように簡単にネットで検索もできなかったもので、ちょっとした説明書きやパンフレットのようなものを読むだけで、その後忘れてしまうような感じでした。靈感のようなものでは全くないのですが、歴史のある建物は10年、20年では纏えない気配を漂わせていてそこが気になっていました。

●物語の主人公になれる建築

一番の大きな転機は京都に引っ越した時でした。学生時代に将来に迷って少しいつ状態になってしまい、このまま大阪で家に閉じこもって悩んでいてはだめだと思って心機一転自分が好きところで暮らしてみようと思ったのです。高校時代に修学旅行で行った際に素敵だなと感じていた憧れの京都に住んでみたいと思い引っ越しました。下鴨神社の近くに住んでいたのですが、ある時友達から「すぐ近くの素敵な洋館でワインを飲めるイベントがあるので行ってみたい」と誘われて行ったのです。それがウィリアム・メレル・ヴォーリズ設計の駒井家住宅でした。その時にヴォーリズという建築家を初めてちゃんと意識しました。以前に行ったことがある山の上ホテルや大丸心齋橋店も設計したと聞き、自分が見たり行ったりした建築と繋がったのです。ヴォーリズが暮らした近江八幡市が私のふるさとの富士宮市と夫婦都市であるという関係もわかり、これまで断片的に知っていたことが、ヴォーリズをもとに繋がっていったことがすごく面白く感じました。駒井家住宅では着物を着ている奥さんが歩きやすいように設計された階段のことなど、ボランティアガイドさんが説明してくれるお話もとても面白く、駒井博士が植物を育てていた温室の中に身を置いてワインを飲みゆったり過ごしました。クリスタルのドアノブや、洋室なのに照明に千鳥の模様がついているところなど、いろんなものがかわいく愛しいと思える体験でした。大学を卒業してなんとなくやりたいことがあるけれども何もできない自分に悩み鬱々としていたのですが、駒井家住宅のような素敵な建物の中にいる自分は、物語の主人公になれるような気がしたのです。自分は社会において何も意味のない人間なのではないかとすごく不安に感じていたのですが、ここにいると自分もこの広い世界の中で物語の登場人物であり、主役にもなれるような気がしました。そこで本当に建築って素敵だと思えたのです。それから山形政昭先生が書かれたヴォーリズ建築の本を読み建築巡りをするようになったのが20代の頃でした。



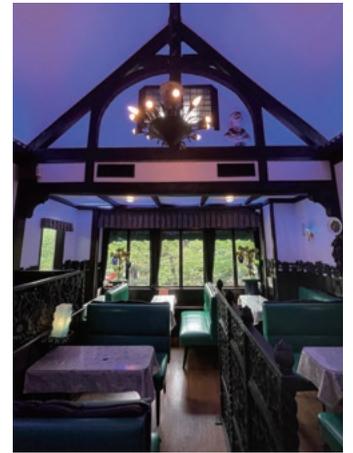
駒井家住宅

●小さなかわいい喫茶店

住宅やレストラン、ホテルなど昔の建物は本当に素敵だなと思っていて、今建てられる建築は同じように感じないことを不思議に思ったりもします。古い建物は自分だったらどうやって住むか、過ごすかなどを想像することが本当に楽しいです。駒井家住宅を訪れた時は今と違って通年で一般公開はされておらず、年1・2回のイベントでした。たまたまワインを飲めるイベントだったので1時間ほどゆっくり滞在できてしかも椅子に座って過ごすことができ、床が近く視線が低くなることによって立っていると気づかないことが見えてきたりします。こういう場所でお茶ができたり食事ができたりすることがすごく面白いと思うのです。京都には喫茶店としては初めて国の登録有形文化財に指定された「フランソア」のほか「ソワレ」「進々堂京大北門前店」「築地」などゆっくり過ごせる古い建築がたくさんあります。泰山タイルを使った喫茶店もあり、色とりどりのタイルがかわいい。こういう柄のワンピースが欲しい、こういうアクセサリが欲しいなど、本当に自分の気持ちがかんたん上がっていきます。小さなかわいい喫茶店だけでなく京都市京セラ美術館などもそうですが規模の大小にかかわらず、壁・床の仕上げや照明器具などいろんなところに視線がいきまわって、建築の中に身を置くだけでとにかく楽しいです。



フランソア喫茶室



喫茶ソワレ

●文化と物語がある大阪・京都

大阪も京都も文化の厚みが圧倒的に違います。まちそのものに文化と物語があり今でも大阪を歩いていると素敵だなと思うビルがたくさんあります。大阪も京都もいい意味で癖があり人もまちも癖が強い。私は癖が強いものが好きでちょっとした違和感があるからこそ立ち止まるし、より深く知りたいと思うのですが、藤森さんたちの路上観察学会がきっかけかもしれません。他の人が通り過ぎてしまうものを自分は面白いと思うかどうかで、人生の豊かさや面白さが変わってくるのではないかと感じます。そういう自分でよかったですし、それは大阪や京都にいたからというのが大きいと思っています。静岡生まれ静岡育ちの私にとって大阪は海外でした。文化も言葉も食べ物も違うと感じるような環境の中で、何かを面白いと感じることがすごく鍛えられました。その後京都に行き20代前半までを関西で過ごせたことがすごく貴重だったと思います。今はある程度の地理感もありますし、大人になっていろいろな経験や知識を積み重ねた上で大阪や京都に行くのとあの当時よりもさらに楽しいです。私はまちをよく歩くのですが、大阪や京都は地続きで面白さが広がっているように感じます。一方で東京は、例えば阿佐ヶ谷とお隣の高円寺、荻窪、西荻窪とは全く雰囲気が違います。一駅ごとに個性が違ってそれはそれで面白いのですが、大阪や京都はまたちょっと違う感じがします。

●母校の建築に萌え直す

中学一年生くらいの頃から何となく自分が普通の環境に馴染めていないと感じ、ちょっと変わり者がある世界に行きたいと思っていました。映画や音楽、ファッションなどにもっと触れたくて、芸大に行けばそういう仲間がいると考えて芸術大学の文芸学科に行きたいと思ったのです。調べると日本大学と大阪芸術大学に文芸学科があり二択でした。高校生の時に大学の見学に行っただのですが、大阪芸大は信じられないほど田舎の山の中であって、山全体が学校のような環境が、都会の中にある日藝よりも面白いと思って進学することに決めました。昨年の10月に卒業後初めて大阪芸大に久しぶりに行ったのですが、学生時代の私は何とも思っていなかったのに高橋航一さんが設計した校舎がすごく素敵でカッコいいと思いました。毎日通っていた通路でさえカッコいいと、萌え直した感じです。写真をいっぱい撮っていたら学生たちから何をしているんだというような目で見られていたのですが、あなたたちは今すごく素敵なおとこで学んでいるということをお伝えになりました。キャンパスに入ってすぐの食堂にある、一見すると無意味に見える丸いカプセルも、それがあつかないかで空間の質が違うなどと考えながら楽しく過ごしました。学生の頃は知識がなかったのですが、今の自分であれば毎日ここで学べる幸せを理解できるわけで、経験を積み重ねることの大切さを感じた瞬間でした。

●自分だけの新たな宝物が見つかる旅

旅の行き先をどこにするか、最初は池波正太郎さんの真似をすることから始めました。池波さんの著書『散歩のとき何か食べたくなって』(注4)や『よい匂いのする一夜』(注5)に、大阪、京都、金沢、松江など都市ごとに章立てて日本全国のことが書かれています。内容は食べたものや泊まった宿、お土産などについてですが、その中にクラシックホテルのことが書かれていて、20代の頃に真似してそれをたどり始めました。日光金谷ホテルや浦郡のホテル、山の上ホテルなど、その頃は気軽に行ける金額ではなかったのですが、コツコツ貯めて半年に1回行くということをしていました。実際に行ってみると、池波さんが書いていることだけではなく、本に載っていないけれどおいしいお料理やお土産物など、自分だけが発見した好きだと思うものが見つかるのです。好きな人の真似をしてみたら、自分だけの「好き」が見つかるようになってきました。その時代はGoogle MAPのような便利なものはないので雑誌の略地図や紙の地図を頼りに行くのですが、迷ったら迷ったなりに面白いものが見つかる。ちょっと不便な中で自分だけの新たな発見や宝物が見つかることが面白くて、それを見つけるために旅に出るようになりました。



山の上ホテル

●人の心をほぐしていく「かわいい」

建築を見ることや取材することの一番の原動力は「かわいい」と思うことです。今でこそまちの中で写真を撮る人が増えていますが、20年前に私が一人で建築をみて「かわいい」と言いながらタイルや窓枠、手すりなどの写真を撮っていると「変わった人がきた」と思われていました。パン屋さんやお菓子屋さんに入った時に「このパンはすごくかわいいと思います。いい顔していますよ。」と言ってすごく褒められていると、最初は怪訝な顔をされるのですが次第に心を開いてくれるのです。「かわいい」という言葉は人の心をほぐしていくのだと思います。私が監修させてもらった「名建築で昼食を」(注6)というTVドラマの中で、田口トモロヲさんの「乙女心って女性だけのものじゃないでしょ」というセリフがあるのですが、年齢や性別を問わず何かを見て一目惚れをするような気持ちや「キュン」と射抜かれるような気持ちは、幸せ度を上げてくれるものだと思います。その理由もなく好きと思う気持ちを、建築やパン、お菓子、店構えを見た時に感じる人が多いです。建築で言うとモダニズムの直線のかっこよさも好きなのですが、やっぱり一番かわいいと思うものは、ちょっと歪んでいたり、不格好だったりするものが多いです。コテの跡が残っているとか、職人さんの手仕事で必ずしも同じ仕上がりではないところを見つけると、そこが「かわいい」と思いますし、パンなどのパッケージでもコンピュータでつくったグラフィックよりも手描きで描いたようなレタリングや、いわゆる「へたうま」といわれるような絵などもかわいいと思います。

●建築めぐりは推し活

私はもともとシャイですごく人見知りですし、取材も得意な方ではないので「建築の写真を撮っていいですか」と声をかけなければいけない時に最初は緊張していました。ですが「好き」と言われて機嫌が悪くなる人はあんまりいないということにだんだんと気付きはじめたのです。最初は気難しそうなおじいちゃんも、私が「かわいい」「好き」と言っているとだんだん顔がほころびます。小難しいことじゃなくても「これすごくかわいいと思いました、好きと思いました、写真撮っていいですか」「どうしてこれをつくったのですか」と単純な質問をしているとどんどん面白い話を聞くことができ、心を開いてもらえるし喜んでくれます。クラシックホテルなどでもスタッフの方に「すごく素敵ですね」と言うと「お部屋を見えますか？」と言われたり、普段入れないところに入れてもらえたりなど、コミュニケーションをとりながら、礼儀をわきまえつつどんどん踏み込んでいった方がいいと気が付きました。

建築ツアーを開催したり参加することもあるのですが、笠原一人先生と宮崎県のまち歩きをしたことがあります。その時に笠原先生が「建築の写真を撮ることや、その人に素敵ですねと声をかけることはすごく大事」「この建物をいいと思う人が増えると、オーナーさんが残そうかなと思うかもしれない、そうしたら建物が残るか残らないかわかる。だからどんどん好き、かわいいって言った方がいい」とおっしゃっていました。それで私も自分が開催するときには「建築をアイドルとしてどんどん写真を撮っていいと思います」と言うようにしています。ただそれが周りの迷惑にならないように気をつけなければいけないのですが、参加者の皆さんに「建築めぐりは推し活だ、建築旅は推し活の遠征。ファンですということを伝えよう。私たちは建築という推しを愛でている、いいことをしているのだから仲間をどんどん増やしていこう。そうすることでいい形で建築が残っていったり、いい建築が建っていく。私たちには小さな力しかないけれど、ファンの声を届けよう。」と伝えています。同時に推し活をする時はちゃんとルールを守り礼儀を持つことが大事です。建築を訪れて鑑賞する時には、声をかけてから写真を撮ったり、むやみに触らないなどルールや礼儀を守りましょう、ということも共有しています。

●建築ファンの裾野を広げる

東京建築祭や京都モダン建築祭などの建築ツアーに来てくださる方は、2割ぐらいがコアな建築ファンですが「写真を見て素敵だなと思い、甲斐さんがやってくれるならと来てみました」という方が8割ぐらいとすごく多いです。そのたびに「基本的な知識は調べたら出てくるから覚える必要はなくて、自分の目で見て感じて、今この場を楽しみましょう」「いまここに来て、なにが次の手がかかりを掴んで帰ってください」というお話をします。写真を撮ることもいいし「この建築家さん素敵だなと思ったら他にどんなものを設計しているか調べてみて、次はそこに行ってみよう」「建築ツアーが楽しいと思ったら次もまた参加してみよう」「自分はタイルが好きだからタイルが素敵な場所に行ってみよう」など、自由に楽しむことが大事だと思います。参加者の中には本に載っているところを全部巡ろうと、行ったところに色を塗ってスタンプを押していくように楽しんでいる方もいらっしゃいます。「学ぶというよりも純粋に行く楽しみを見つけてください。建築を見る時の柱のようなものを一人一人が持ったらいいですよ」ということを伝えていきます。ある人はいろんな建築で押したスタンプを集めているノートを見せてくれたり、行く先々のポストカードを買って私にプレゼントしてくれたりします。みんながそれぞれの楽しみを見つけて、それを私にも伝えてくれるのが嬉しいです。私も建築土産のようなものが好きで、ステンドグラスの模様がグッズになっているとつい買ってしまいます。そういったものを買う人が増えれば、またつくってくれる建築も増えるのではないかと思います。どんどん仲間が増えて、建築ツアーに参加して下さる方が自分がこんな体験しましたよと話してくれるのがすごく嬉しいです。

私は最近になって建築をお仕事にしている方たちと直接お話しする機会を持てているのですが、一般の人をもっと設計者の方とお話できるような機会があればいいのではないかと思います。東京建築祭で壺中居^(注7)のツアーをしたとき、設計事務所の方に直接案内をしていただいた後、場所を変えてみんなでお茶をしました。参加者はみんな現役の建築家や設計者の方と触れ合う機会なんてほとんどないので、設計者の話を聞くことを楽しませてくれてすごくいい場だと思いました。「壺中居のことをよく知らないけれど応募してみても当たったから来た」という人もいたのですが、そこには楽しもうという気があり、みなさん受け入れ態勢を持っていると思います。私はどちらとも接点を持っているので、お茶や食事ができる解説付きツアーで建築に携わっている方たちのお話も聞けるような場をつくる役割ができたらいと思っています。さらに私たちのような一般の人だと建築にまつわるちょっとしたトリビアのような面白さや、設計者の「ひととなり」に興味を持つことがあります。設計者のちょっとしたエピソードにみんなが興味を持って、その人を面白いと思ったり、魅力を感じたり、そういうところからもファンは増えるし、ファンの裾野を広げていくことにもつながると思います。



東京建築祭の様子（2025年開催） ©東京建築祭



壺中居（竣工当時の様子）

●世の中は自然と建築できている

一般の建築ファンの方は、建物の管理をしている方や解説をしてくれるボランティアの方とは接する機会があっても、建築設計という職業に携わっている方と触れ合う機会がありません。設計者の方とお話すると、個性的で面白い方がたくさんいらっしゃいます。みなさん独特の雰囲気を持っていたり、独自の美学があったり、チャーミングな部分もあつたりします。私はこの世の中は自然と建築できていると思っています。自然と話すことはできないけれど、建築をつくっている方たちからはいろいろな話を聞くことができます。その接点がなさすぎるから建築を難しいと思ってしまうのかもしれませんが、世の中こんなに建築だらけで成り立っているのに、それらをつくっている方たちと触れ合っていないことが不思議に思えます。まちを歩いている時に見える建築全てに設計者や建てている技術者がいると思うと、果てしなく楽しみが広がりますし、そういった方々と触れ合うことで、建築との向き合い方も、もっと楽しい方向に持っていけるのではないかと思います。

本頁は東京都杉並区某所にて行ったインタビューをもとに作成しています。

聞き手：三宗知之（日本建築協会編集企画委員長）

北村政尚（日本建築協会U-35委員）

注1）『京都おもしろウォッチング』赤瀬川、他著（新潮社/1988年）

注2）『ぼくは散歩と雑学が好き』植草基一著（晶文社/1970年）

注3）『いつも夢中になったり飽きてしまったり』植草基一著（番町書房/1975年）

注4）『散歩のとき何か食べたくなって』池波正太郎著（平凡社/1977年）

注5）『よい匂いのする一夜』池波正太郎著（平凡社/1981年）

注6）『名建築で昼食を』（テレビ大阪/2020年）

注7）『壺中居』東京都中央区日本橋にある店舗、東洋古美術を取り扱う。

東畑建築事務所 設計（1973年）

写真提供：甲斐みのり氏（壺中居、東京建築祭の様子を除く）

東畑建築事務所（壺中居）

東京建築祭実行委員会（東京建築祭の様子）



かい・みのり

1976年静岡県生まれ。大阪芸術大学卒業後、数年を京都で過ごし、現在は東京にて活動。旅、散歩、お菓子、手みやげ、クラシックホテルや建築などを主な題材に、書籍や雑誌に執筆。『歩いて、食べる 東京のおいしい名建築さんぽ』はドラマ「名建築で昼食を」の原案に起用された。